

新品種「きゅうき」の結実特性について

和歌山県果樹試験場 栽培部 水上徹

1. はじめに

ウンシュウミカン「きゅうき」は、平成26年2月27日に品種登録された12月上旬以降に完全着色する和歌山県オリジナル品種です。「向山温州」より豊産性で浮皮の発生が少なく、減酸が早いほか、早生品種のような良食味を有する有望品種です。「きゅうき」は、これまでの観察から、隔年結果性が低く結実性が優れることが知られていましたが、その詳細については未調査であったため、平成25年および26年に実施した着果状況に関する調査結果をご紹介します。

2. 調査内容

有田市宮原町(育成地)に植栽の「きゅうき」原木樹(以下「きゅうき」)、対照として同園植栽の「向山温州」を供試しました。平成25年および26年に、開花期にあたる5月上旬から第二次生理落果終期にあたる7月中旬に、枝先20cm又は50cm調査法で、旧葉数、新葉数、新梢数、直花数、有葉花数を計測後、直果、有葉果数を一月ごとに調査して、着果率を算出しました。また、期間中は育成地の気温変化も記録しました。

3. 結果および考察

1) 旧・新葉数、新梢数、および花数について

平成25年では、「きゅうき」は「向山温州」に比べ新葉数は多く、総花数は少ない傾向でしたが、平成26年では多くなりました(表1)。花数の増減については、前年の着果量の多少による影響と思われました。

2) 着果率について

平成25年では、「きゅうき」の調査枝あたりの着果率は、「向山温州」に比べ高く推移しましたが(図1)。平成26年では、着果率はやや低い傾向になりましたが、二次生理落果終期は「向山温州」と同程度になりました(図1、2)。また、表層部分の着果状況を観察したところ、「きゅうき」では群状に着果しているのに対し、「向山温州」はまばらに着果していました(データ未裁)(図3)。なお、平成26年の一次生理落果終了後の着果率の低下については、新葉、新梢量の多さによる影響と考えられました。

3) 気温について

平均気温は、着果率が高かった平成25年において、やや高く周期的に変動する傾向がありましたが(図4)、着果率との関連性は明らかではありませんでした。

4. まとめ

「きゅうき」は、総花数や新葉の多少に関わらず、一次および二次生理落果後の着果率は「向山温州」と同等かそれ以上で、樹冠表層への結実性は良好でした。「きゅうき」は隔年結果性が小さく、連年着果が期待できるため、間引き摘果による着果量の調整が重要になると思われます。

表 1. 「きゅうき」および「向山温州」の開花期における旧・新葉数、新梢数および花数

		旧葉数	新葉数	新梢数	直花数	有葉花数	総花数
平成25年	きゅうき	23.7	13.2	1.8	21.1	1.8	22.9
	向山	22.8	8.2	1.2	26.4	3.6	30.0
平成26年	きゅうき	98.1	59.3	11.8	65.9	12.5	78.4
	向山	65.0	36.9	6.3	45.0	5.8	50.8

※平成 25 年は、枝先 20cm 調査法にて、各樹より 10 枝を調査した平均値(調査日：平成 25 年 5 月 17 日)

※平成 26 年は、枝先 50cm 調査法にて、各樹より 8 枝を調査した平均値(調査日：平成 26 年 5 月 9 日(新葉数のみ 6 月 9 日))

※育成地の満開日は、両年、「きゅうき」「向山温州」とともに、5 月 15 日

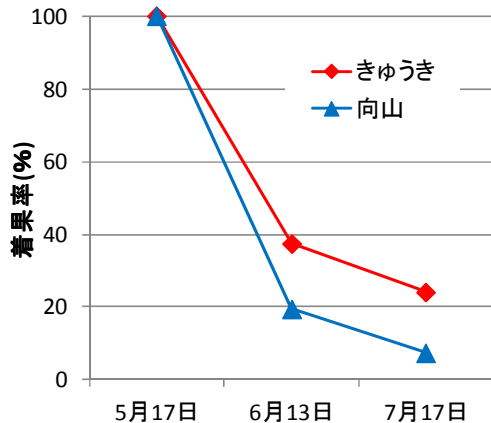


図 1. 「きゅうき」および「向山温州」の調査枝あたりの着果率の推移(平成 25 年度)

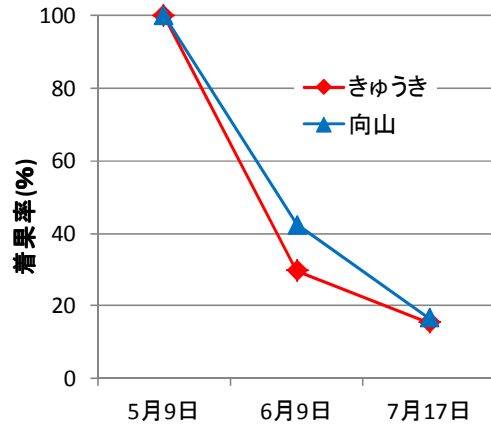


図 2. 「きゅうき」および「向山温州」の調査枝あたりの着果率の推移(平成 26 年度)



図 3. 「きゅうき」(左)および「向山温州」(右)の着果状況(平成 26 年 6 月 9 日)

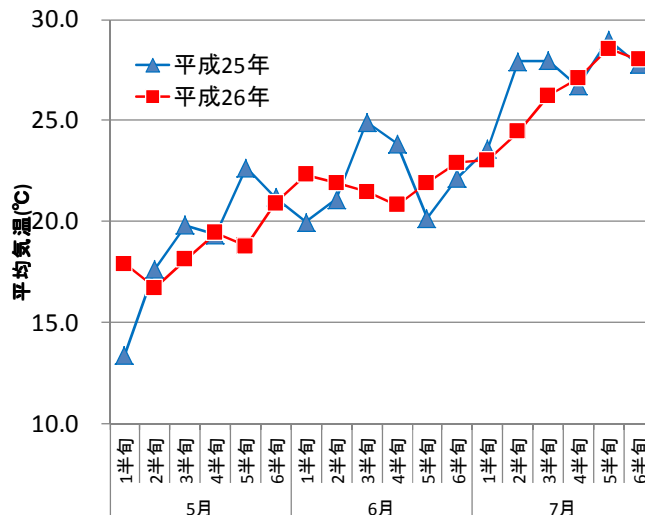


図 4. 「きゅうき」育成地における開花期から二次生理落果終期期までの平均気温の推移